
短編集

安楽樹

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集

【Nコード】

N7948Q

【作者名】

安楽樹

【あらすじ】

短編物語や詩などを集めてみました。

2002年の始まり

人生に歯車つてのはあるもんだと思う。

ちよつとしたズレがその後の関係を離していつてしまう……、そんな歯車が。

それは空間であるかもしれない。

時間であるかもしれない。

そして感情なのかもしれない。

そんなわけで一人で初詣に行くのだった。

既に時間は零時を回っていた。

冬服を着込み、マフラーをし、手袋をし、ニット帽をかぶる。

この冬初めてここまで防寒をしたと思う。

歩き出す。

目的地は裏の山を越えたところにある神社だ。

坂を登る。

辺りには誰もいない。

住宅地を歩いていくと、犬が新年を祝って鳴いていた。

遠くでは、救急車が新年を祝って鳴いていた。

山を登る。

階段があるのでつらくはない。

街灯が間隔を空けて立っていた。

光を目指して進む。

息が白いのが分かった。

光に照らされると、今度は目の前が闇に閉ざされる。
闇を目指して進んだ。

…… 人生の真理に気付いた気がした。

山を登りきり振り返ると、鬱蒼としていた森の樹が切り倒されて夜景が広がっていた。

樹が無くなってみると、すぐ近くに住宅の森が広がっていた。
薙ぎ倒された樹の向こうに、色とりどりの明かりが灯った夜景が見える。

…… 世界の未来が見えた気がした。

山を越えると公園に出た。

広々とした公園にはやはり誰もいない。

近くの家のイルミネーションが鮮やかだった。

音が消えた。

光だけが煌めいていた。

世界にただ一人だけいた。

音が消えた。

音は時間の流れを意識させる。

時が止まった不思議な感覚に囚われる。

だから一人で歩くのは好きだ。

しばらく進むと、ようやく動いている人間に会った。

神社には多くの人が集まって、新年の誕生を祝っていた。

……僕は一人、2001年の墓参りをした。

運命

それを一言で表すならば、『運命』という言葉が一番合っているんじゃないだろうか。

懐かしい道を歩いていた。

今日は風が強く、目に砂が入らないように、僕は風から目を逸らした。

すると、君が目の前に現れたんだ。それは突然というより、僕らはそこで待ち合わせでもしていたかのように。

吸い込まれるように僕が手を伸ばすと、君は故郷に帰ってきたみたいに、僕の手の中に収まったよね。

風に運ばれてきた君は、またすぐに風に乗ってどこかへと消えていった。

分かってたんだ。君はすぐにどこかに行ってしまう事なんて。

それは、人生という大きな航海の中での、ほんの小さな波の一つだったけれども、僕はそれを忘れたくないと思った。

今日はとても、僕を含めたみんなが故郷の光景の中に溶け込んでいく気がした。

あの、風に大きく揺られている樹も、犬と共に駆け回る子供たちも、子供連れで犬の散歩に来ている女の人も。

もうすぐこの街を出て行ってしまう僕には、あの子供たちが幼い頃の僕たちに重なって見えた。

・・・感傷的すぎるかな。

自分を少し客観的に見て、ありもしない周囲の視線を気にしてしまう。

けどやっぱり、自分が過ごしたこの街をもう一度見ておきたくて、この公園に一つだけ建っている、展望台に登った。

・・・相変わらず、殺風景なだけのこの公園に似合わない前衛的な

デザインだな。と、二人がすれ違うのがやつとの階段を上りながら考えるのはこれで何回目だろう？

また、そう考える日が来るのだろうか。

屋上まで上がると、この街が大体一望できるのだった。まだまだ、緑が多くて嬉しい。

さすがにここは風が強いけど、それがこの街も僕との別れを惜しんでいるような気がして、そう思うと何だか寒さも苦にならなかった。

ぐるりと見渡す。

あれはきつとあの建物だ。あの橋はきつとあの道の橋だろう。あそこはどこだろう？まだ行ったことは無かったかな。

何かこの街に別れの言葉を贈ろうと思ったが、何も出てこなかった。思い出は、言葉にならない。

「お待たせ。」迎えが来たみたいだ。

じゃあね。そろそろ僕は行くよ。

またきつと、ここに戻ってくる事もあるだろう。

新しい街で、僕は変わってしまうかもしれないけど。

・・・でも君は。

できればずっと、このままで。

運命（後書き）

-
-
-
-
要するに、風で飛んできた枯草に何気なく手を伸ばしたら、本当に取れてしまった！
という感動を表したかったのですよ。

色彩の理由

「この部屋、黒い家具が多いね。」

彼女の言葉を聞き、僕は黒いソファに座って、二本目の煙草に火を点けた。

少し部屋を見回した後、答える。

黒、が好きなんだ。

いつも夜になると世界を染める、黒。

夜ってのは、静かだろ？

僕はきつとそれを思い出して、心が落ち着くのさ。

「あと、青いのも。」

青い枕を抱えて、彼女は眠そうだった。

・・・そのまま、こてんと倒れる。

僕はゆっくりと煙草をふかし、続けた。

そう、それから青も。

空と海。

これ以上ない、自然の色だろう？

僕は自然を想像すると、リラックスできるんだ。

「ふん。でも緑だって、自然って感じがするし、落ち着くよ。」

横になった彼女は、外の桜を見てそう言った後、両目を閉じた。
あと一分もしたら、静かな寝息が聞こえてくるだろう。

僕は煙草を消し、音楽をかける。
そして、「そうだね。」と言って、軽く笑った。

勧誘

ピンポン

「どちら様でしょうか？」

あ、どもー。読買新聞です。

「すみません、うちは新聞いらないんですよ。」

まあ話だけでも。安田さん、開けて下さいよ。

「すみません、今、手が放せないもので。」

そう言わずに、今なら色々サービスしますから。

「本当にすみません。他の方を当たってください。」

3ヶ月、3ヶ月だけでいいですから。

「・・・それでは、仕方ありませんね。」

え！取って頂けるんですか！？ありがとうございます！

「いいえ、違います。私が出す問題に答えられたら、新聞を取りましょう。」

へっ？いやそんなこと言われても・・・。

「ではいきますよ。『読買新聞の一面広告の広告料は?』」

えっ!? そんな知りませんよ。だから安田さん……。

「それでは残念です。またどうぞ。」

安田さん? 安田さん!

「……………」

——次の日。

(ちつきしよう、昨日は何だかうまくやられたな。でも「またどうぞ」って言ってたし、今日はちゃんと広告料も調べてきたし、もう揚げ足はとらせんぞ……。)

どもー。読買新聞です。安田さん。

「その声は……、また来たんですか。昨日も言いましたように、うちに新聞は必要ありませんから。」

そう言わずに、お願いしますよー。問題に答えられたらいいっておっしゃってたじゃないですか。

「……確かに言いましたね。」

でしょー? 今日はきちんと調べてきたんですよ。えーと、¥500・……。

「では今日の問題です。『読買新聞の発行地域・部数は?』」

え？発行部数？・・・広告料じゃないの？

「・・・残念でした。またどうぞ。」

いや待ってくださいよ、ずるいですよそんな！広告料調べてきたんですから！

「・・・・・・・・・・。」

（くっそっつ。）

*

安田さん。新聞お願いしまーす。

「読買新聞が初めて発行された年と創始者は？」

・・・・・・・・、昭和・・・・１・２年？読山・・・・買之介？駄目だ、わかんね。

「残念、またどうぞ。」

「自分の体験談を元にして、『新聞の有効性』をテーマに４００字以内の小論文を完成させなさい。」

・・・・ろ、論文まで！？

「残念です、またどうぞ。」

つ、次こそは、次こそ必ず・・・。

*

ぜえ、ぜえ、安田さん・・・、お願いします。

「では、・・・『読買新聞の1ヶ月の購読料は?』」

え・・・・・・・・・・?2400円です!!

ガチャ

「フフ、おめでとうございます。もうお出する問題がありませんよ。それでは約束通り、契約いたしましょう。」

・・・・・・・・・・、え!?

「・・・やはり、驚かれましたか。」

そんな、お客さん。・・・あんたまさか目が・・・。

「いいんですよ。この新聞を持っていれば、私も頑張れる・・・。そんな気がするんです。」

そ、そんなこつちこそ、あんなのおかげで・・・。

「・・・・・・・・・・あなたの努力のおかげですよ。」

お客さん、洗剤も付けとくよ。・・・・・・・・・・毎度あり。

選択

「・・・でさあ、もうあんな酷い会社、辞めてやっただ」

「え？本当に？・・・あんなにやる気だったじゃない」

「最初に聞いてた話と違ったんだよ。上司だって全然人の話聞かないし」

「・・・じゃあ次はどうするの？」

「うん、それなだけどさ。俺、前からアパレル関係やってみたかったんだよね。でさ・・・」

・・・嘘。そんな話、聞いたこと無い。

私は視線を落とすと、黙って残りのお酒を飲み干す。

最近愚痴が多いと思っていただけ、予想した通りだった。

彼が今の会社に勤めてから半年。

正直またか、と私は思っていた。

彼が前に勤めていた会社は、4ヶ月だった。その前の会社も半年。

新しい会社で半年が過ぎて、今度は大丈夫かな、と思っていた矢先の出来事。

まだ夢中で喋り続けている彼に、考え直す気は少しも無さそう。

・・・私は、彼と付き合い始めたときの事を思い出していた。

まだ就職活動中の頃に、偶然説明会で隣になった彼。

飲みに行ったお店で、彼女とうまくいっていないという相談に乗った。

そんな定番の話に釣られて、いつの間にか彼と一緒にいるようになっていった。

会社を選択する方法は、恋人を選ぶ方法と似ていると思う。

時間はかかっても一つだけを絞って受けるのか、とにかく自分が入

れそんな会社を選ぶのか。

それと同じ傾向が、恋人を選ぶ時にも見られるような気がする。

・・・いや、違うかな。

その人の人生で、『選択する』という行為において、似ていないものなど無い。

結局あなたは、自分の出来そうな事を優先して選んだ、という事。

・・・そこに私がいたから。

私があなただを好きだったから。

あなたは私を選んだんだわ。

それが悪いなんていうつもりはない。

私だってあなたが好きだったんだもの。

・・・でも。

きつと同じように私は捨てられる。

私に不満をもった時、そこにあなたを好きな人がいれば。

あなたはあなたが好きなのね。

いつも自分が損なわれないような選択をする。

今ごろになって、その事がよく分かった。

・・・私もそろそろ考えたほうがいいのかもね。

たった一つを優先して、十分に時間をかけて決めたとしても、必ずそれが正解であるとは限らないから。

「・・・次、何飲む？」

空になった私のグラスを見て、彼が尋ねる。

私はそれをやんわりと断り、そつとコートに手を伸ばした。

「さよなら。次は正解だといいわね」

私が最後に言ったそのセリフは、一体誰への言葉だったのか。
それはついに、私自身にも分らないままだった

けむし

ある所に一匹のけむしがいました。

他と同じように、そのけむしも醜く、ぶよぶよと太っていました。

けむしはそんな自分が大嫌いでしたが、どうする事もできずに、毎日食べてばかりいました。

「・・・だって、私はけむしなんだから。」
ずっと、そう思っていたのです。

けむしは、お花畑に住んでいました。

そこに咲く色とりどりの花は綺麗で、数多くの虫がその魅力に惹かれ、集まってきました。花びらの奥にある、甘くて美味しい蜜を求めてくるものもありました。

けむしはそんな花にずっと嫉妬していました。そして、少しでも花の美しさを盗んでやろうと毎日花を食べていました。

ですが、ずっと食べてばかりいるので、さらにまたぶくぶくと太り、けむしはどんどん醜くなっていくのでした。

ある時、けむしが雫に映った醜い自分を見て落ちこんでいると、一匹の美しい蝶が現れました。

その蝶の羽には、綺麗な花が広がっており、誰もが蝶の羽を見て羨ましがりました。

今まで、けむしはずっとその様子を陰から見ていたのです。そのため、無性に自分の姿が恥ずかしくなったけむしは、こそこそと葉っぱの陰に隠れようと思いました。

ですが、それを見た蝶は、けむしの背中に向かって言いました。

「そんなに悲しまなくても大丈夫よ。あなたはそのうち、私のように美しくなるのだから。」

自分の昔を思い出した蝶は、けむしを少しでも慰めてあげようとしたのです。しかし、けむしはその言葉をつっぱねるように言い返しました。

「そんなわけ無いでしょう？ いやみな事を言うのはやめて頂戴。」

そう言つて蝶に怒りをぶつけ、ますます落ちこんでしまいました。

だつてそうでしょう？

醜いけむしがあんなに美しい蝶になるなんて、一体誰が思うのでしょうか？

蝶は、少し悲しい顔をした後、どこかへ飛び立ってしまいました。また、けむしは花を食べ始めます。来る日も来る日も、花を羨み、妬み、憎んでばかりいました。

そのうち、食べきれなくなるほど花を食べ尽くすと、突然けむしの背中に鋭い痛みが走ります。

けむしはあまりの痛みに、そこから動けません。段々と気が遠くなっていきました・・・。

気が付くと、光が差しこんでいます。

けむしが外に出てみると、自分の体が以前とは全く違うことが分かりました。

体の中に溜めきれなくなつた嫉妬は綺麗な羽となつてすらりと伸び、周囲の羨望の的である優雅でスリムな身体になったのです。

けむしは大空に羽ばたきました。太陽の光が羽に反射し、きらきら

と輝いています。

けむしの心は、一杯に満たされました。
ですがすぐに、今度はお腹が減ってきました。ずっと花を食べていないからです。

（早く花に集まった欲望を食べないと。それから、皆にこの美しい体を見せてやりましょう。）

けむしは自慢気にそう思い、いつも食べていた花の方へ飛んでいきました。

しかしあと少しで花へたどり着くという瞬間、羽が何かに引っかかってしまいます。

それは、動けば動くほどきつく喰い込んでくる蜘蛛の糸でした。

慌てて羽を見ると、ねばねばした糸が絡まっていて美しさも台無しです。そればかりか、体中がなじがらめにされて、飛び立つ事ができません。

葉っぱの陰から、「キシッ！」と誰かの声がしました。

けむしがそちらを見ると、恐ろしい身体をした蜘蛛が、素早くけむしの方へ近づいてきているのが見えます。

蜘蛛は、8本の足をぎざぎざに動かしながら、牙の生えた口元をしきりにガチガチと鳴らしてにじり寄って来ます。

「何て美しい羽なのかしら、憎らしい。バラバラに引き裂いて食べてやりましょう。」

蜘蛛はそう言うと、けむしをさらに糸でぐるぐる巻きにしてしまいます。

けむしは慌てて言いました。

「いいえ、私は蝶なんかではありません。実は醜いけむしなのです。」

それを聞いた蜘蛛は、いくつもの目でけむしをジロリと睨みます。
「そんなわけ無いでしょう？ いやみな事を言うのはやめて頂戴。」
・・・大きな牙がけむしの羽に向かって伸びてきます。今まさに食べられようとする瞬間、けむしは思いました。

（醜かったあの頃と、みんなから妬まれる美しい今と、一体どっちが幸せなのかしら。）

けむしを食べ終わった蜘蛛は、満足してまた元の場所へ戻っていき
ました。

その様子を、また別のけむしが見ています。そして、美しい蝶の憐
れな最後をあざ笑うのでした。

また今日も、太ったけむしは花の美しさを食べ続けます。

だって、けむしは美しさへの嫉妬と欲望を食べて、蝶へと羽化する
のだから。

春を告げる色彩

一体誰が最初に始めたのだろうか。

物語売りの目の前には、見渡す限り桃源郷かと思うような満開の花々が広がっていた。

桜より早く春を告げるその樹は、人々の心にもいち早く春をもたらす。

……花びらと共に降り注ぐ物語は、

＊ 春を告げる色彩 ＊

カツツ、コツツ、コツーン……

一体いつまでこんなこと続ければいいんだろうか。

暗い森の中でひたすら、斧を振り続ける毎日が続いていた。

北向きの厳しい斜面での重労働にはさすがに慣れたが、気が滅入りそうなこの薄暗さには未だに慣れることができない。

帰り道にふと気付くと、鮮やかな黄色の福寿草が花を咲かせている。

「もう、春か……。」

ここでの春を知る手がかりは、朝起きたときの気温とこういった野草の知らせぐらいしかなかった。

それ以外には、全くと言っていいほど周囲の景色は変わらない。

山間にひっそりと佇む、人口もそう多くない山村。そこで私はきこりをやっている。

城下町建設に続き、次々に拡大を続けていく都の建築用木材調達のため、ここいら一体は一面が杉や檜の林となっていた。

この村は、きこりで生計を立てている者が数多かった。

最盛期の頃は、そんな景気に後押しされて、我々はかなり羽振りが良かったと言っていただろう。

「……アンタ、また蔵の米がカビてきちゃってるよ。」

「そんなもん早く捨てつちまえよ。またすぐもらつて来るから。」

「ホント、ここは湿気だけはいつまで経っても駄目ね……。」

「仕方ないだろ。そのおかげでメシ食えてんだから。今日だってまた10本も切ったからな。またすぐに好きなだけ白飯食えるよ。」

実際、自分自身もそうだった。

あの頃は、生活に必要な物は全てどこから勝手に運ばれてきていると思っていた。

だが次第に、都の成熟と共に木材の需要も減り始め、徐々に山での仕事は少なくなっていた。

仲間のうちからは、きこりの代わりに棺桶や卒塔婆の仕事を引き受ける者が出てきた。

そしてそちらが軌道に乗り始めると、徐々にきこりを辞めるものも現れるようになってきた。

確かにそうだった仕事は人間にとって必ず必要なものであり、重要

な事だとは思うのだが、どうしても外の目はそう好意的には受け止めてくれない。

「……なんだか陰気な村ね。」

外からの親戚を案内すると、決まってそんな言葉が返ってくるのだった。

……無理もない。

春になつてもこんなに暗い所は、雪国にすらそうないはずだ。

ついに、ちらほらと村を捨てて去っていく者も出始め、さらに段々と森は荒れていった。

人の手が入らない森はより一層暗くなり、生き物も少なくなり、まるで死んでいるようだった。

*

そんな中、子供が生まれたのをきっかけに、私は一本の樹を植えることにした。

「どうしちゃったんだアイツは……？」

「あんな銭にもならない樹を植えて、どうかしちゃったんじゃないか？」

周りですがそんな声が囁かれることもあったが、私は聞こえないふりをした。

もちろん収入はかなり減った。だが幸いにも、唯一、妻は私の気持ちを理解してくれたようだった。

縁側で子供をあやしている時、ポツリと呟く。

「やっぱり日が入ってくると気持ちいいわね。この子の名前にもぴったりだわ」

希望の春、という意味で名付けたその子は、穏やかな陽だまりの中で気持ち良さそうに眠っていた。

その寝顔を見ると、私はやはり自分が決めたことは間違ってた、とそう思う。

思わず私も暖かな日差しと子供につられ、昼寝をしてしまいそうな春の日が続いた。

それから私は少しずつ杉や檜を減らし、同じ樹を植えていった。手に入る収入が減った代わりに、自分で食べ物を作らないとならなかったが、その分、子供と一緒に過ごせる時間が増えた。

「父ちゃん、見てみて！あそこにうさぎがいるよ！」

「おお、ホントだな。……ああ、子供もいるみたいだ。」

「ホントだすごい！すごいね！」

杉を切つてからは、動物も増えるようになった。

ずっと暗かった森に日の光が入り、そこで育つ草が出てきたからだ。野うさぎを始めとする草食動物や、ケヤキをねぐらにするむささびの姿も良く見られるようになった。

その頃になると、春先にうちの様子を見にきた近所の連中も真似して、同じ樹を庭に植える者も出てきた。

ある者は「私は紅葉が見たいから」と、どんぐりを植えて秋を楽しみにするものもいたようだ。

そのおかげか、これまでは里に降りてきていた熊などの動物も、どんぐりが増えたおかげであまり里へは降りてこなくなってきた。

らしい。

気が付くと、近所一体がうちの庭と同じ樹でたくさんになっていた。そして誰からか、この辺りのことを『梅郷』と呼ぶようになったという。

……また今年も春が来る。

そしてその後には、むせ返るような青い梅の匂いが辺りに立ち込めることだろう。

私たちはそれを集め、酒に漬けて寝かせておくのだ。

そして何よりも早く春を告げるあの花と共に、春を祝って杯を酌み交わそう。

それが我々きこりの何よりの楽しみ。

耳を澄ますと、今年初めてのうぐいすの声が聞こえていた。

タマネギの泣ける話

「お母さん、何で玉ねぎをむくと涙が出るの？」

「それはね……」

——その昔、まだ世界に一人の人間しかいなかった頃。神様はその女の人の食べ物としてたくさんの果物を作りました。

果物は、取っても取っても無くならず、おかげで女の人も食べ物に困らずにすみました。その頃は、タマネギもその果物の1つで、皮をむくと取ってもおいしい実がなっていました。そのおいしさは、果物の中でも1番2番を争うぐらいでした。

女の人はタマネギがとっても大好きで、何度もタマネギの実を取っては、それはそれはおいしそうに食べていました。タマネギも、素敵な笑顔の彼女がとっても大好きで、毎日食べて欲しいと思っていました。

でも、神様は次の男の人を作るのに時間がかかってしまい、女の方は長い間一人ぼっちになってしまいます。

ある日、タマネギは木の下で泣いている彼女を見つけ、声をかけました。

「お嬢さん、なぜキミは泣いているの？」

女の方は泣きながら答えます。

「なぜ人間は私しかないの……？一人ぼっちはもう嫌……」

つらくて女の人は何度も泣いていました。

優しいタマネギは、女の人が一入ぼつちで泣いているのをかわいそうに思つて、神様をお願いしました。

「神様、彼女は一人ぼつちで泣いています。僕を地面に降ろしてください」

すると神様は答えます。

「地面に落ちると、今のようなおいしい実はできなくなってしまうぞ。それでもいいのか？」

タマネギは笑顔で答えました。

「——はい。彼女に笑顔が戻るなら」

それを聞いた神様はタマネギを地面に降ろしました。そしてタマネギは、女の人に頼んで自分を地面に埋めてもらいました。

すると、たちまち芽が伸び、地上にきれいな花を咲かせました。

「なんてきれいなお花なの！」

泣いていた女の人も、その素敵な花を見て涙が止まりました。

さらに、その花の蜜の匂いにつられて、遠くからちようちよも飛んできました。それを見た他の果物も、同じように地面に落ちて、たくさんのお花を咲かせます。たちまち、いろんな虫たちがそこに集まってくるようになりました。

「まあ素敵。きれいなお花畑になったわ」

女の人に笑顔が戻ります。

女の方は、もう一人ぼっちではありませんでした。
また素敵な笑顔が戻った女の方は、お礼を言いたくなって、タマネギのところへ行きました。

「あなたのおかげでもう淋しくなくなっただわ。またおいしいあなたを食べさせてもらってもいいかしら？」

タマネギは、少し悲しそうに言いました。

「いいよ。地面から抜いてごらん」

言われたとおり女の方はタマネギを地面から抜き、前と同じように皮をむき始めました。

……ですが、一枚皮をむいてもあの頃のおいしそうな実は出てきません。むいてもむいても皮ばかりなのです！
タマネギは言いました。

「地面に落ちて花を咲かせたから、もう僕にはおいしい実はできないんだ」

それを聞いた女の方は、また涙を流し始めました。

「……ごめんなさい、私のために……」

それを見たタマネギは静かに言いました。

「泣かないで。僕はキミの笑顔が大好きなんだ。そうだ、僕の皮をシチューにして食べてごらん」

言われたとおり、女の方は料理してタマネギの皮を食べてみました。

「……………おいしい！」

なんておいしいのでしょうか！思わず涙も止まってしまうほどです。
驚いている女の人に、最後にタマネギはこう言いました。

「僕はいつでもキミのそばにいるから。キミはもう一人ぼっちじゃないよ」

それを聞いた彼女の目から涙がこぼれます。

——でもなぜか、彼女の顔は今までで最高の笑顔なのでした……。

「……………おしまい。だから、久美もタマネギはちゃんと食べないとダメよ」

「うんっ！久美、ちゃんとタマネギさんも食べるっ」

夜景にはブルースがよく似合う

・・・あと3つ。

あと、信号を3つ過ぎたら、私たちの関係は終わりを告げる。
3回目の冬は越せなかったわね。とうとう。

また信号が青に変わった。

あと、2つ。

小さな街の、名も無い通りを走っていると、普段は何でもない家の
灯りがどうしようもなく欲しくなって、涙をこらえてしまう。

「・・・泣いてんのか？」

そんなわけないじゃない。

そんな優しい言葉はもう、とっくに置いてきたんでしょ？

ラジオから流れるBGM。

夜景にはブルースが、よく似合う。

去年の夏は流行りの歌が流れてたわね・・・。だけど、もう夏は過
ぎてしまった。

さっきの言葉が詩の歌詞なら、少しは素直に、泣けたでしょうに。

赤い満月が近付いて来て、二人を乗せたシャトルも止まる。

風も黙って、車の中は静寂だけが喋り続ける。

そう。静寂があんまりうるさかったから、私は目を背けたの。

月はすぐに、青く輝く。

シャトルもすぐに、走り出す。

あと、1つ。

窓の外には夜空と夜景。

流れているのは景色？・・・それとも、私？

あれ。今日は月が見当たらない。

待ってよ。最後までちゃんと見守ってよ。・・・あの初めてのデー
トの時のように。

多分月と一緒に、涙もどこかへ隠れてしまった。

結局ついに、月は見つからないまま、最後の信号で止まる。

もう・・・。

「お別れだ。」

彼が先に口を開いた。

「そうね。」

・・・そんなのわかってるもの。

「初めて迎えに来た時を、思い出すな。」

彼の目は前を向いたまま。

「やめてよ。」

やめてよ、今更、昔話なんて。

「・・・。。。」

彼の口はじつと閉じていたけれど。

「・・・。。。」

私も黙って、相槌を打った。

・・・辛いのは、私だけではないのかしら。

2年という月日は、お互いの存在を無くすには、永すぎた？
一人の人生でなく、二人の人生だった2年間。

・・・明日からはまた、私一人の人生を歩きましょう。

「泣いてもいいよ。」

あなたの前では、泣き虫だった。

「・・・泣かないわ。」

あなたの前では、もう2度と。

信号が青になる前に、私は車を降りる。

あなたは驚き、何か言うけど、窓の外には何も聞こえない。

そして、私は振り向かず、どこかへ向かって歩き出すの。

その時、たった一粒こぼれた雫を、なだめるように月が照らしてくれた。

・・・大丈夫。

きつと冬の寒さが、私の涙を乾かしてくれるわ。

そうね、涙は忘れましょう。

泣いてあなたは戻って来ても、泣けるほど切ないあの頃は、二度と戻って来ないから。

翼の生えた少年

僕に、念願の翼が生えた。やっとこれで空が飛べるんだ。でも僕に翼をくれた大きな鳥は言った。

「空を飛ぶには、とてもとても高く、とてもとても広い場所じゃないといけないよ。でなければ風にのれずに、空から落ちてしまうからね。」

それから僕は、とてもとても高く、とてもとても広い場所を探しに家を出た。

翼はとても大きくて、小さい体の僕にはすごく重かった。でも空を飛ぶためならと思って、一步一步しっかりと歩いていく。時には肩が抜けそうになり、時には翼の重さにつぶれそうになったりもした。

ふらふらになり、あちこちにぶつかって傷ついた。疲れ果て、何度も倒れそうになった。

だけど僕は旅をする。飛べる場所を探して、旅をする。

ある時ふと路地裏を見ると、そこへは空へと続く坂があった。

ここならきつと・・・。

僕はそう思って、ボロボロになった足を踏み出す。坂はどんどん上へと伸び、このまま空へとつながっているんじゃないかと思わせる。だんだん疲れも忘れ、駆け足で坂を上っていく。僕はそこに、とうとう空に近い場所を見つけた。羽根を大きくはばたかせる。

・・・だめだ。

ここはとても狭すぎる。

坂の上はすごく高かったけど、目の前にもっと高いビルが建っていた。ここから飛んでも、すぐにあのビルにぶつかってしまう。僕はとても悲しくなって、地面にひざをついた。大きな羽根も、地面について汚れてしまう。傷ついて、このままでは空を飛べなくなってしまう！

僕は必死で立ち上がると、坂を下りるため、また一人、歩き始めた。僕の翼も、また眠りについた。

より一層、翼は重く、僕の肩にのしかかる。もう既に、腕は上がらず、肩には血がにじんでいる。

だけど、旅を止めようとは思わない。

だって、空を飛べるんだよ？

眠ることも食べることも忘れ、ただひたすら空を求め、歩く。

歩き続けたその先で、ただ一度だけ、僕は眠りについた。

なんだかとても、落ちついたんだ。

そのおもちゃのビルにいたたくさんのおもちゃたちが、あまりにも賑やかだったから。

それから僕は七つの海と三つの大陸を渡り、とうとう一度も休むことは無かった。

「おかえり。」

誰かがそう言った。

いつの間にか、元の場所へ戻ってきてしまったみたいだ。でもそこは、旅立った時とは全く違っていた。地面が高くせり上がっていて、とても空に近い。

「進むんだ。進んでいれば、何かが変わる。」

誰が言っていたのか思い出せない。

でも、その言葉は僕の翼から聞こえたような気がした。

僕は頂上に立ち、吹き抜ける風に身を任せる。

・・・そこは、この世のどこよりも、空に近く。

風を身にまといながら、翼は眠りから覚め、自然とその両手を広げた。

また風が吹いた。

あっけないほど簡単に、僕は空を飛んでいた。

遙か空は、地面の上を歩いていた頃とは全く違う世界を見せてくれる。

僕は、ぐると周りを見回した。

風の子供達のかけっこ。

雲のうたた寝。

鳥たちの歌。

憧れていた空に、僕はいた。

誰よりも自由で、誰よりも遠くへいける気がした。

しかし、僕はついに力尽き、粉々になってしまう。

そのまま、風になった。

・・・今度は空の旅を続けるんだ。

よし、また歩いていこう。今度はどこまで行けるだろうな。

あーあ、空を飛ぶのも、楽じゃない。

僕は、そう思った。

サングラスの魔法使い

「君は知ってる？サングラスをかけた魔法使いの話。」

「え？知らないわ。」

「なんでも、恋の魔法が大得意なんだってさ。」

「・・・そうなの？」

「魔法のステッキの代わりにサングラスをかけて、可愛い子にはすぐに魔法をかけてしまうんだよ。」

「つまり、あなたがその魔法使いっていう事？」

「いいや、僕はまだ半人前なんだ。」

「それなら、どうしてサングラスをかけているの？」

「これを取ったら、君に魔法をかけてしまうから。」

「・・・そう？私は何ともないわよ。」

「じゃあ、どうやら僕の方が魔法にかかってしまったみたいだね。」

「ふふ、上手いのね。」

「良かったら、君をエバーランドに連れて行くよ。」

「エバーランド？」

「大人だけの、魔法の国さ。」

「空も飛べるの？」

「きつと、ね。」

「ねえ、さっきの話、聞かせてよ。魔法使いの話。」

「姫のお望みとあらば。」

「ふふつ、お願いですわ、王子。」

「仰せのままに、ってね。・・・確かその魔法使いは、魔法をかけるときにだけ、そのサングラスを外すんだってさ。」

「・・・ふん。どうしてサングラスを取るの？」

「知りたいかい？」

・・・そう言つて、魔法使いは彼女に口づけをしたんだつて。君は知ってる？

サングラスをかけた魔法使いのことを。

なんでも、一夜の恋を演出する魔法が大の得意なんだつてさ。

サクラサク

.....。

公園に、少し強い風が吹いた。

物語売りが一冊の本を読んでいると、今年最初の桜の花びらが舞い落ちてくる。

その花びらはひらひらと、本の中に挟まってしおりとなった。

丁度それを期に、物語売りは本を閉じる。

花びらが落ちてきた桜の方を見ると、その木のふもとに一人の男が立っていた。

彼は何かを待っているように、ただ桜の花を見上げている。

そしてまた、ひととき強い風が通り過ぎ、桜吹雪と共に男は消えた。

——彼が持ってきた物語は、

【桜咲く】

またこの季節がきた。

・・・僕は、やや不機嫌になる。

蕾はそのほにかんだ笑顔を広げる季節だというのに。

ひどい花粉症である僕は、この季節が好きではなかった。

3月も終盤に差し掛かり、ずっと冬だと思っていた暦がそろそろ新しくなる頃だ。

・・・桜はまだ五分咲きだが、春は確実にもうそこまで来ていた。

そんな、越してきて何度目かの春先、不思議な少女と出会った。

最初に彼女を見たのは、TVのキャスターが桜の開花を知らせた日

の朝だった。

会社に行くために川沿いを歩いていると、ぽつんと一人、ひときわ大きな木にもたれかかっている女の子を見つけたのだ。

年は僕よりも随分と若そうだったが、その佇まいはとても落ち着いて見えた。

誰かと待ち合わせでもしてるのかと思って、その朝は黙って前を通り過ぎるだけだった。

しかし、日が暮れる頃に帰ってきてても、彼女はまだ木の下にいた。まさか、一日中ここにいたのだろうか？

少し訝しげに思いながらも、僕は声をかけることはできなかった。

・・・もう、女の子に気軽に声をかけられるような年ではないし。

その夜、窓からは咲いたばかりの瑞々しい桃色の花達を見ることができた。

もうすぐ、満開の桜のトンネルを通って会社に行くことになるだろう。

きっと今日の夢には、あの女の子が出てくるような気がした。

・・・でも結局、その日に見た夢は覚えていなかった。

次の日、いつものように家を出ると、既に頭の上では桜のプラネタリウムが広がっていた。

満天の桜の花の間から、微かに星のような青い空が見える。

休日のせいで、家の周辺は花見に来た地元の人たちで賑わっていた。・・・今日は彼女はいないのだろうか。そう思って昨日彼女がいた辺りを探してみたが、それらしい姿はどこにも無かった。

僕は、普段慣れていない人の多さに気分が悪くなり、夕方まで部屋で寝ている事にした。

夕方。

むせ返るような桜の花の匂いで目が醒めた僕は、少し静けさを取り戻してきた桜並木の見物をしようと、外に出た。

桜自体は、そんなに嫌いではない。

やや寝惚け眼で赤とピンクの空を眺めていたが、ゆっくりと視線を落とした先で、僕は目を疑った。

・・・そこに、彼女がいたのだ。

さっきまで、眠っていたからかもしれない。

桜と彼女のコントラストが、僕にはまるで夢の世界にいるように思わせた。

気が付くと僕は、彼女の前に立っていた。

吸い込まれるように、話し掛ける。

「・・・誰かを、待っているの？」

随分と長い時間が過ぎたように思えた。

一枚の花びらが地面に落ちるのを見てから、彼女はやっとその桜色の唇を開いた。

「・・・妹を、待っているんです。」

そよ風よりも微かなその言葉は、男の理性を麻痺させる。

耐え切れずに、僕は彼女を掻き抱いた。

彼女は抵抗もせず、ずっとどこかを見ている。

・・・その視線は、永遠に失ってしまった何かを儚んでいるようだった。

夢見心地の中、僕は花の蜜を吸いに來た蝶になったような気分だった。

彼女の体が赤く染まるにつれ、花の色もより一層、鮮やかさを増してきたように感じる。

目が眩むほどの桜吹雪の中、僕は気を失った。

・・・最後に見えた彼女は、少し悲しそうな顔をしながら、桜を見ていた。

「おい、アンタ。」

・・・あれ？

気が付くと既に朝。僕は桜の木の下で眠っていたようだった。

「アンタ一体、何やったんだ？」

彼の視線の先を辿り、目を上に向ける。

満開だったはずの桜の木から、その仄かな花びらは全て散っていた。

その日から、二度と彼女の姿を見る事はできず。

僕は激しく後悔し、思う。

(・・・彼女はきつと、桜の精だったんだ。)

そう。確かに、彼女を表すとすればその言葉はたった一つ。

『桜のように美しく。』

そして幾つかの季節が巡り。

もうすぐ彼女と出会った季節がやってくる。

まだ肌寒いが、きつとこれからは暖かくなるばかりだ。

僕はまた川沿いを家に向かって歩きながら、雪が解け始めた桜の木々に見とれていた。

そして、過ぎ去った季節を惜しむように、彼女と出会ったあの頃を思い出す。

あ。

あの木の蔭に彼女が見えたような気がして振り返った。

・・・いない。気のせいかな。

まだ地面にうつすらと降り積もっている雪を見ると、桜の花びらの

ように白かった彼女の肌を鮮明に思い出す。

桜の間から見える、空を眺めながらぼんやりと歩いた。

丁度仲良さそうに歩いていく、二人のよく似た姉妹とすれ違う。

（・・・妹を、待っているんです。）

そういえば、彼女は出会えただろうか？

白い雪と共に現れる、彼女とよく似た妹に。

誰よりも速く走りたかった馬（前書き）

・・・僕らが空を飛ぶ蝶に羨望の眼差しを向けるのと同じように、
蝶もまた、地面を力強く走りたいのかもしれない。

誰よりも速く走りたかった馬

その馬は、どの馬よりも速かった。

それを確認するため、彼は毎日毎日草原を走り回っていた。

速く走る事こそが彼にとって全てであり、もう他には何もいらな
いと思っていた。風を切るあの感覚。地面を力強く蹴るあの快感に、
彼は酔いしれる。

しかし、他の誰も彼について行く事ができなかったため、彼はずつ
と孤独であり、それがいつしか不満に変わっていった。彼は自分と
速さを競い合う相手を探していたが、もう地上で誰も彼についてい
けるものはいなくなってしまった。

ある時、彼が空を見上げると、自分を追い抜いていくツバメが見え
た。

何にも邪魔される事なく空気を切り裂いて飛んでいく姿を想像し、
馬は更なるスピードを欲した。

その新たな世界を求めて追いかけてみるが、とうとう彼に追いつく
事はできなかった。

それから彼はツバメを何度も追い抜こうとして走ったが、やっぱり
ツバメに追いつく事はできない。

地面を走って追っていくと、坂の起伏があり、川があり、森があつ
て、真っ直ぐに空を飛ぶツバメに追いつくには到底無理があつた
のだ。

その馬の様子を空から見ていたツバメが、空から降りてきて馬の背
へと降り立った。

ツバメは馬が自分を追い抜こうとしているのは分かっていたので、
からかい半分で馬に話し掛けた。

「どうして君はいつも僕の後をついてくるんだい？」

負けず嫌いの馬は、ツバメにからかわれたのが気に入らず、鼻息を
荒くしながら答えた。

「地面は狭すぎて、僕の力が出せないんだ。もし僕にも羽が生えて
いたら、後ろをついてくるのは君のほうだと思っけだね。」

それを聞いたツバメは馬鹿にしたように笑いながら、「じゃあ僕が
神様に頼んで、君に羽をつけてもらおうか？」そう言って、また空
に飛び立って行ってしまった。

次の日、馬が眠りから醒めると、背中から立派な羽が生えている事
に気付いた。

馬は大喜びし、早速空を飛ぶ練習を始める。

羽を懸命に動かし、羽ばたいて空を走る。程なくして、馬は空を飛
ぶ事ができるようになった。皆はその姿を見て、彼の事をペガサス
と呼ぶようになった。

しかしペガサスは空は飛べるようになったものの、その大きな体で
はスピードが全然出ない。もちろん空を切り裂いて飛ぶあの感覚は
味わえるはずもなく、ましてやツバメになど到底かなうはずもな
かった。

馬は仕方なく、前のように地面を走ろうと思ったが、今度は大きな
羽が邪魔になり、前のように速く走る事ができなくなってしまった。

・・・今や、彼は地上のどの馬よりも遅くなってしまったのだった。さらに、大きな羽は目立つので、ライオンなどの肉食獣によく狙われるようになった。彼自身は空へ飛んで逃げればいいのだから、いつも無事ではあったが、同じ群れの仲間が代わりに食べられてしまうのだった。その為、他の馬たちは皆、彼を避けるようになった。

馬は相変わらず孤独であり、また同じ不満を感じながらも空と草原を行き来していた。

・・・いくら大空を飛べたとしても、空に彼の好物の青草はないのだ。

ツバメもあれから姿を消し、他の馬からは避けられ、時折すれ違うコウモリだけが、同情に満ちた目で彼を見ていた。

とうとう孤独に耐え切れなくなった彼は、神様に頼んで自分をツバメにもらった。

もう速く飛ぶ事などに興味はなく、時々地面を速く走る馬に複雑な視線を投げかける。

そして時折空から降り、馬の背に止まって話し掛けるのだ。

「やあ、どうして僕の後をついてくるんだい？」

天馬の話

何処までも広がる果てしない大地と空。

そこには、雄大な翼を持つ白鳥と滑らかで逞しい脚を持った馬がいました。

白鳥は、その雄大な翼で大空高く自由に羽ばたく事が何よりも大好きで、いつも雲を友に、青い空を何処までも高くゆつくりと飛んでいました。

葦毛の馬は、その逞しい足で大地を縦横無尽に駆け回ることが何よりも大好きで、いつも風と語りながら緑の草原を何処までも走る事を何よりの喜びとしていました。

ある澄んだ晴れの日、白鳥は草原を駆ける美しい馬を見つけました。風の妖精と見間違ふような葦毛の体を見て、白鳥は一目で心を奪われてしまいます。

願わくば側に寄り添って、楽しそうに走るその姿をずっと眺めたいと思ったのです。

そんな彼を見て、雲は不思議そうに呟くのです。

「見ているだけじゃなくて、話し掛ければいいのに。」

その頃地上でも、葦毛の馬は真っ青な空を翔ける純白の鳥を見ていました。

白く綺麗な雲に似た羽根が生き生きと大空を流れるのを見て、思いを馳せます。

できることなら、自分も一緒にあの青い空を漂ってみたいと思いました。

「何でいつも空を見上げながら走っているの？」

いつも一緒に横を走る風は、そう彼女に尋ねるのでした。

葦毛の馬は、白鳥のその真つ白な大きい翼に憧れ、白鳥は葦毛の馬のすらりと長く伸びた雄々しい脚と蹄に恋焦がれました。

すると彼等の願いが通じたのか、彼女が憧れていた大きく白い翼が、春の心地良い風と共に目の前に舞い降りてきます。

それを見た葦毛の馬は、真つ白な雲が降ってきたのかと思いました。天から現れたその雲は、彼女に向かって優しく話し掛けます。

「君のそのたくましく走る姿に、僕は一目で心を奪われた。できることなら、ずっと君の側でその姿を見ていたい。」

これは夢ではないかと思いつながら、彼女はその言葉に答えました。

「私もずっとあなたが優雅に空を飛ぶ姿を見ていました。できるならもっと近くでその素敵な翼を見せて下さい。」

それから二人は同じ時を過ごすようになります。

二人ともお互いに、片時も離れたくないと考えていました。

お互いさえいれば、他に何もいらないとそう思っていました。

「あなたと一緒になら、大地が無くても良いわ。」

「僕もだよ。君と一緒にいられるのなら、翼が折れたって平気だよ。」

季節は巡り、また暖かい春がやってきた頃。

それは何気ない一言でした。

「君も空を飛べたら良かったのに。」

その一言に、葦毛の馬は少しムツとしました。

「あなたこそ、一緒に大地を駆け回れたらさぞかし素敵だったでしょう。」

ついついトゲのある言葉を返してしまいます。

「そんな言い方ってないだろ。」
それを聞いた白鳥も、少し機嫌が悪くなってしまいました。

それから徐々に、二人は一緒にいることに窮屈さを感じてきました。何故なら、白鳥は天高く舞い上がることを止め、葦毛の馬は風を切り裂くほど速く駆ける事をしていなかったからです。

段々と、白鳥は葦毛の馬よりも青くて広い大空に焦がれ、葦毛の馬は、白鳥よりも遠くて遙かな大地を懐かしむようになっていきました。

ある時白鳥は、つまらなそうにしていた葦毛の馬に向かって、とうとうこんな事を言ってしまいます。

「君を束縛するつもりは無いよ。君が走りたければ走れば良い。」
白鳥の突き放したようなその言葉を聞いた葦毛の馬は、とても悲しい気分になりました。

「私もよ。私のせいであなただがあの大空に飛び立てないと言うのなら、私なんていなくなったほうが良い。」

葦毛の馬はそう言くと、泣きながら風のように駆け出しました。慌てて追いかけた白鳥の翼に、雨粒のように彼女の涙が当たります。・・・しかし、風と同じように速い彼女は、あっという間に白鳥の視界から見えなくなってしまうました。

葦毛の馬は悲しみのあまり、あても無く走り続けます。

しかしあれほど好きだった大地が、今はまるで冷たくて固い石のようでした。

そしてとうとう、とても暗くて深い森に迷い込んでしまうのです。

葦毛の馬は地面から空を見上げましたが、空はどこにも見当たりません。

彼女の脚は棘で傷付き疲れ果て、ついに一步も歩けなくなっていました。

その頃、白鳥は必死で葦毛の馬を探していました。ですが、どれだけ見渡してもどこにもいません。

以前と同じ空が全く心地良いものに思えず、空はまるで吹雪のように冷たく感じられるのでした。

それでも白鳥は探し続けます。

・・・やがて、大きな森の上までやってきました。

しかし森は深すぎて、空から地面は全く見えません。

いくら探しても、彼女のあの素敵な葦毛はどこにも見当たりませんでした。

既に白鳥の翼は薄汚れ、よろよろと今にも地面に墜落しそうになりながら飛んでいます。

冷たい空は容赦なく白鳥へと降り注ぎ、あんなに雄大だった羽根をもぎ取るうとするのでした。

ついに白鳥が飛び疲れて諦めかけた時です。

深く広がる森の地面から、小さな白い馬が飛んで来るのが見えました。

その馬は、白鳥のように白く優雅で、たくましくしなやかな体と脚を持っていました。

さらに、その背中からは大きくて真っ白な翼が生えているのが分かりました。

その白い空飛ぶ馬は、白鳥の目の前まで飛んでくると、彼を導くように森へと飛んで行きます。

驚き、不思議に思いながらもその白馬についていく白鳥。

そしてようやく二人は・・・。

* 0 *

「・・・あら、もう寝ちゃったのね。」

・・・ガチャ

「ただいま。・・・おい、あの子はもう寝たか？」

「ええ。丁度さっきまでお話を聞かせていたところ。」

「そうか、ご苦労様。・・・明日はロンドンまでフライトだから。」

「分かった。じゃあ夜はいらないのね。」

「ああ、おやすみ。」

「・・・おやすみ。」

・・・ボタン

「・・・あ、そう言えばまだお話の途中だったわね。」

「だから、あなたに天馬って名前を付けたのよ。」

うさぎとさぎ

うさぎが酷く暴れた、その次の日だった。
詐欺師の僕は、彼女に出会った。

正直、久々の当たりだと思った。

彼女は大手の不動産会社の令嬢らしい。
具体的には聞かなかったが、僕の情報網からすると、ほぼ間違いない。

よし決めた。今回のターゲットはこの子にしよう。

家に帰り、うさぎに餌を与えながら計画を練る。

鼻だか口だか分からない部分をふんふんと動かしながら、餌を探すうさぎ。

その目の前で餌をちらつかせながら、僕はやけに真剣にうさぎと戯れる。

絶対に、目の前の餌を捕らせまいとして。

次の日も、彼女と会った。彼女は、名門女子大に通っている。

僕は帰宅時間に合わせて、高級車で迎えに行った。もちろん、知り合いに借りた物だ。

そのまま軽く、ドライブする。行き先は定番の海。

その日はずっと二人で話した。僕も壮大な夢なんか話した。そうした方が後々役に立つからだ。

本当は、夢なんてない。

恋愛の詐欺は、まず相手を選ぶ事だ。

こちらにやたらと干渉してくる相手は良くない。できるだけ控えめで、自己犠牲を厭わないタイプの子が良い。

自己陶醉型の性格なら、さらに。だ。

そして、自分に惚れさせるよりも、情が移るように仕向けるのだ。
過ぎた恋愛感情は邪魔になる。

それが、長い仕事を通じて学んだ事だった。

今日も大丈夫だ。

順調に計画は進んでいると言っていいだろう。

僕はまたうさぎと戯れながら、餌をやる。こいつは、いつまでたっても僕には懐かない。

そんなことは大して気にしてはいないのだが、何故か今日に限り、随分としつこかった。

何度餌を取り上げても、諦めない。いつもなら、ふてくされて寝てしまうのに。

ゲージの外にまで目を向けながら、餌を求めてうろろするうさぎの姿が、僕を妙にいらつかせた。

- - -

そしてしばらくの時間がたった。

綿密な計画であるほど、長い時間を要する。しかし、今回は何だか心がざわついて落ち着かない。

予定よりも少し早めに、計画を進めることにした。

もちろん、いつもの倍は慎重に。

今度は徒歩で、彼女を迎えに行く。そして、安い喫茶店で休憩したあと、父が事故に遭った事を告げた。

架空の父は寝たきりになり、延命処置には莫大な金額が必要になる事を彼女に伝える。

思った通り彼女は、自分に何か手伝える事はないかと言ってきた。
しかし、僕はやっぱりとそれを断る。そう、今はまだ。

そして、近いうちに海外へ行くかもしれないので、今までのように
は会えなくなると告げた。

帰り際の彼女の沈んだ顔が、何故か僕の心に引がかかった。

家に帰ると、うさぎは大人しく寝ていた。

珍しい。そう思いながら僕も大人しく寝た。

それから数日、あちこちに手配をする。そろそろ、引き際だ。
計画をもう一度おさらいする事にする。

父の手術は海外で行われ、いつ帰ってくることができるか分からない。
い。・・・お金は適当に、向こうまでの交通費がないと言え
いだろう。

何故か、お金を取る方法よりも、別れる方法を真剣に考えてしま
うのは、僕の悪い癖だった。

もし、もう一度会ってしまったらして、彼女が苦しんでいる所など
見たくはない。

ふいにうさぎが暴れだした。

何となく点けていたTVから、ニュースが流れている。

「本日、大手不動産会社の。。。が、不動産詐欺の疑いで告訴され
ました。・・・。」

え？・・・確か、彼女の父親の会社だ。

安物のTVの中で、無表情な男が無感情な声で喋っていた。

しばらく呆然としていると、不意に携帯が鳴る。彼女からだ。

僕は商売柄、滅多にターゲットからの電話を取る事はないが、今回
はつい電話に出てしまった。

「・・・もしもし。」

- - -

数時間後。

それほど遠くない場所にある広場で、待ち合わせする事になった。

僕は先ほどの計画だけは忘れないように、綿密に頭の中でシミュレーションする。

それでも動揺は収まらず、緊張したまま彼女を待った。

程無くして、彼女はやって来た。丁度、時計台が11時を告げる。

今夜は、いつもと時間の流れが違う。

一通り、彼女の口から状況を聞いた。・・・やはり、ニュースは本当だった。

僕は仕事が失敗した事よりも、なんだか彼女のこのの方が気になった。けど、なんて言っているのか分からず、押し黙っていた。

そして、きつともう二度と彼女に会う事はないだろうという事も考えた。

少し、胸の奥が苦しくなる。

何とか別れの言葉を口にしようと考えていると、彼女の方が先に口を開いた。

「もう、お別れですね。」

僕の口は凍ったまま動かない。

彼女の顔が見れず、下を向いている僕の顔を、彼女はじっと見つめていた。

「・・・あの、これ受け取ってください。お父様のために。」

差し出された包みを開けてみると、高そうな貴金属がいくつか入っ

ていた。

ようやく動いた口から「・・・ありがとう。」と。

出た言葉は一言だけ。

それを聞いた彼女は、僕の頬に軽くキスをすると、夜の闇に溶けていった。

僕の頬に涙が流れる。

ずっと無くしたと思っていたのに。

家に帰ると、うさぎがじつと僕を見ていた。大きい黒目が潤んでいるような気がする。

突然、こいつと出会った時の事を思い出した。

僕が初めて好きになった女性。彼女が黙って消えた時に、たった一つ残された思い出。

僕の名がついたこのうさぎ。

恋に目がくらんで、あまりに純粋だった頃の僕は、きっと今日のあの子とよく似ていた。

僕はずっと、このうさぎにあの頃の僕を見ていた。

自分の事など構わずに、相手の幸せだけを願っていた、あの頃の。

僕はこの街を出ることを決心した。

仕事も何もかも捨てて、また新しい僕を見つけよう。

ずっと空っぽだった僕が、彼女に残してあげられるものは何もないけど。

せめて僕からの最後の愛の証に、このうさぎを贈ろう。

七夕

遠距離恋愛の二人。

年に一度の七夕の日。

随分と久し振りに二人は会う約束をした。

「久し振りに、会えるね。」

「うん、ようやく。」

「遅れたりしないですよ?」

「はは、気をつけるよ。それよりも、当日は七夕だろ?」

短冊に願いを書いておけという彼。

彼女は彼に早く会うことができずように、と書く。

「あ・え・ま・す・よ・う・に、と。」

「これで大丈夫よね。なんたって、織姫と彦星の年に一度の逢瀬の日なんだから。」

「笹はないけど、・・・まあ仕方ないか。」

七夕当日。

空は生憎の大雨。

ザーッ・・・

『・・・新幹線は、現在全面運行を見合わせており・・・』
「うそっ！何で今日に限ってなの!？」

新幹線が動かないと、彼はこちらに来れない。

彼女はがっかりしながら彼に電話をかけるが、何度かけても彼は出なかった。

一応約束の時間に駅で待つてみるが、やはり彼は来ない。
それでも、ずぶ濡れで待ちつづける彼女。

「何で電話にも出ないの？・・・もう最低・・・。」

「・・・ぐすつ・・・。」

「織姫と彦星も、雨だからきつと会えないんだね・・・。」

『RRRRRR・・・』

彼女が、どうでもいいやと言う気分になってきた所へ、電話がかかってきた。

表示されるのは、彼の名前。

（今更かかってきても、もう遅いよ・・・。）
そう思いながらも、彼女は電話に出た。

「・・・もしもし、竹彦？」

「お前今どこにいるんだ？」

「え、駅だけど・・・。今日・・・駄目だったね・・・。」

「何言つてんだ早く戻ってこいよ。家に入れないだろ？」

「・・・え？」

それだけ言つと電話は切れてしまった。

彼女は半信半疑ながらも走つて家に戻る。

そして、もう真つ暗な自宅の前に目を凝らすと、ドアの前には、彼女と同じくずぶ濡れの彼がいた。

「何で！？どうやって来たの！？」

「・・・何だよ、来たらいけなかったか？」

「そうじゃなくて！何で！？」

「はは、うそうそ。実はお前を驚かそうと思ってさ。昨日のうちに着いて、今日はコレ取りに行つてたんだ。」

・・・そう言つて彼が指差した先には、背の高さほどの笹があつた。

「せつかく七夕だつたからさ。」

「・・・。。電話ぐらい出てよね?」

「あゝ、多分圏外だつたから。電波届かなかつたんだと思う。」

「全く、何やつてるのよ・・・。心配するでしょ、・・・バカ。」

夜には雨も上がり、綺麗な星空が広がつた。

二人は並んで空を見上げている。

「今日晴れてなかつたからさ、七夕の二人と同じように、会えなくなつちやつたかと思つた。」

「・・・ふん。」

「何その氣のない返事」。すごく悲しかつたんだからねつ。」

「・・・だつてさあ、知らないの?・・・織姫と彦星は、地面から見られるのが恥ずかしいから、雲に隠れて会うんだよ?」

へえ。

・・・そうなんだ、知らなかつた。

私はそう言つと、カーテンを閉める。

「あれ、せつかく星が綺麗なのに。」

彼が言つ。

確かにそうだけどさ。

だつてね。

私たちも、空から二人に見られたら恥ずかしいでしょ?

彼との対話 1

『それほど、依存していく事が怖いのかい？』

「久し振りだな、主よ。」

いつも彼はそう答える。

俺がずっと相談相手になってもらっているのが彼だ。

沈着冷静で落ち着いていて、頼りになる。

俺が道に迷いそうになるたびに、この店で待っていてくれる、とても信頼できる彼だ。

時にはバーテンとなり、時にはディーラーであり、マスターであり、ある時にはグラスであったりその中の液体であったりする事もある。ともかく、迷った時には彼に語りかけるのが、俺なりの解決策だった。

・・・そして今日も。

「彼女は、責任感や義務感で結婚して欲しくないんだってさ。」

今日の彼は、普通に隣で飲んでいるビジネスマンだった。

但し、酔っ払ってもいなければ、よれよれのスーツも着ていない。

固そうな眼鏡なんかをかけて、全身からエリートっぽさを漂わせている青年だった。

彼は足を組み、ジンバツクに軽く口をつけると、たつぷり間を置いてから相槌を打つ。

「ふむ。ではその彼女は どうして欲しいのかな？」

俺は決して彼のほうは見ず、アルコールの入ったグラスと目の前のボトルの並んだ棚を見るときもなしに見ながらその問いに答えた。

「私の事が好きで、ずっと一緒にいたいって思って結婚して欲しいんだって。」

「君はそうは思っていないのかい？」

彼との会話はいつもそんな調子だ。

彼とは会話していても向き合ったりはせず、お互い一人で飲んでるようにして、ただ語り合う。

「・・・いや実は、俺の独り言に彼が勝手に相槌を打ってくれているだけなのかもしれない。」

「そんなんだったら、もうとくに結婚してるよ。」

「ほう、中々言うじゃないか。」

「そんな風に結婚するんだったら、誓いの言葉なんて要らないだろ？そもそも、式なんて必要ない。わざわざ親戚一同招いてお披露目をする事もないじゃないか。」

「ではそうする意味を、君はどういう風に考えているんだい？」

「・・・形式かな。愛情の証としての形を取り結ぶ儀式。」

ここで彼はしばらくの熟考時間を要した。

俺は大人しくそれを待ち、その間にグラスを一杯、空にする。空になったグラスの氷が音を立てた時、彼は再び口を開いた。

「君にとつての結婚というのは一種の契約のようだね。」

「・・・そうかもしれない。『俺はお前以外の女には手を出さない』言ってみればそんな契約かな。」

「君は愛情に責任感と義務感が伴った物が結婚になると思ってるみたいだ。でも彼女は、結婚を愛情の上位種だと思ってる。」

俺はその言葉には何も返さず、新しいグラスに注がれた液体に広がる波紋をじつと見ていた。

辛うじて、二人の会話に小さな呟きを注いだ。

「感情的な女つてのは怖いよ。どれだけ積み重ねたものも、その感

情一つで全部ひっくり返されそうだから。」

「その感情が他を向いただけで、きつと君は簡単に捨てられる。．．それを恐れているのかい？」

「．．．彼女に多少は責任感や義務感つてものがあればいいけど。俺がゴミ屑だった方が、まだ環境問題を考えるだけマシだったと思うな。」

「君がここへくる時は、決まって酷く悲観的だな。．．．たまには私にも前向きな姿を見せてもらいたいものだ。」

「そう、．．．それほど依存するのが怖いんだよ。」

「ふむ。今日の話はそれだけかい？．．．なら、私からの言葉はただ一つ。」

『主よ。どうやら君はもう手遅れのようだ。』

「幸いか不幸か、君はまたあの感情の迷路の中へ迷い込んでしまった。出口があるかどうか分からない、それごと崩壊してしまうかもしれない、そんな迷路へ。．．．もう入り口は見えない。引き返しているのか進んでいるのか、それすらも分からない。それでも君は立ち止まるわけには行かない。例え、君自身がその幕を引く事になっても。」

「．．．．．。」

「精々、君の健闘を祈るよ。」

「．．．さて、私は君がまた分岐点に立つ時まで眠るとしよう。さ
らば、愛しき憂鬱よ。」

そう言つて彼は席を立つ。

元々一人だった俺だけが一人残った。

．．．グラスは空いたが、まだしばらく席を立つ気にはなれなかった。

また、氷が音を立てて揺れる。

彼との対話 2

「彼女は、永遠なんて無いって言うんだ。」

そこは、ファミリーストランだった。

そして彼は、そのポテトだった。

「ほう、主よ。それは何でだい？」

ポテトは少し、しなびていた。

でも俺はその方が好きだったから、それで良かった。

「何でって、実際にそうだろ？いつかは死ぬんだし。」

俺はそのお喋りなポテトに向かって真面目に言う。

より一層しなびたポテトは、深く頂垂れながら呟いたようだった。

「君はいつの間になんか大人になっちゃったんだい？・・・淋しいことだ。」

フォークを口に持っていき、一口でポテトを平らげる。

芋を何度か咀嚼し、喉の奥に押し込むと俺はまた口を開いた。

「ただそれは、彼女の不倫経験がそうさせるんじゃないかって思うんだ。」

「ふむ・・・。」

すると今度は別の細長いポテトからそんな声が聞こえた。いつの間に。

そしてまたしばらくの熟考時間。

やがてポテトを食べ過ぎて、喉がつかえそうになり水を慌てて流し込んだ所で、解答が返って来る。

まずは彼の順番からだ。

「いくら結婚して契約を交わしても、所詮それは破られてしまう物なのだと彼女は知った。」

そして俺。

「だから愛情によつて結婚を求めるんだろうな。」

「きつと彼女は心の中では永遠を信じたがっているんだね。」

「・・・そうだいいけど。」

「ふう。・・・君は相手を好きになるほどに、欠点ばかりを気にして不安を感じるその悪い癖を直したほうがいいな。」

そう言いながら、ポテトは呆れたように肩をすくめて見せた。そんなポテトに、俺は躊躇なくフォークを刺して口へ運ぶ。

「分かつてるよ。」

とうとう皿の上には、ポテトは一つだけになってしまった。

固くて、冷たい。

「『永遠はあるつて信じさせてよ!』いつかそう言つた彼女に、俺は『あるよ。信じさせてやるよ。』つて言つたんだ。」

「・・・例え嘘になるかもしれないけど、彼女にそんな冷めた言葉は言いたくなかつたんだね。」

「・・・うん。」

「けど逆に、今度は君の方が信じられなくなつてしまった。」

「・・・俺はかつての不倫相手に、『昔の彼女を返せよ!』つて言つてやりたいよ。」

「お前のせいで彼女は大事な事が信じられなくなつてしまつたんだ、つて?」

「きつとね。それから彼女は、どこか倫理観が欠如してしまつたんだ。」

「そのせいで、君も彼女が信じられなくなつてしまつた、と?・・・怒る相手が違ふんじゃないかい?」

「わかつてる! わかつてるんだけど・・・。」

俺は固くフォークを握り締め、強くテーブルを叩いた。
ウェイトレスが顔を上げて、こっちを見る。
固くて冷たいポテトは俺に言った。

「怖いんだね。」

「・・・怖い。」

「君は深入りすればするほど、それを失う事を考え、非常に怖がりになってしまう。」

「ずっと深入りしないようにしていたのは俺の方だって気付いたよ。彼女なんかよりよっぽどね。」

「主よ。・・・もう手遅れだな。」

「ああ、手遅れだ。」

「今だろつがこの先だろつが、彼女を失えば君はまた取り返しのつかない傷を負うだろつ。」

「・・・。。。」

「そしてきつと君はまた・・・。」

何か言いかけていた彼を、俺は一息に口の中へ放り込んだ。
固くなったポテトは、思った通りひどく味気なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7948q/>

短編集

2011年10月8日14時41分発行